

二〇二六年度(令和八年度) 一般選抜型選抜 後期 国語 問題用紙

※ 解答はすべて解答用紙に記入すること。

一 次の①～④の傍線部分の読み方を書きなさい。また、⑤～⑧の傍線部分を漢字に直しなさい。

その際、必要なら送り仮名も書くこと。

- ① 民意に判断を委ねた。
- ② 選挙後に、株価が急騰した。
- ③ 未曾有の危機に直面する。
- ④ 最初に立てた目標と計画を貫徹した。
- ⑤ 合併のチャンスをついた。
- ⑥ 理論よりじつせんが大切だ。
- ⑦ 対外貿易のきんこうが保たれる。
- ⑧ 都内をじゅんかんするバスに乗った。

二 次の文章を読み、問一から問六に答えなさい。

石器が鉄器に、馬車が自動車にかわっていくように文学がかわっていくかない事実は、誰しもよく知っている。自動車が発達すれば馬車は滅び、鉄器がひろまれば石器は用済みになる。こうして技術や物質生産の世界では、古いものは次第に、あるいはどしどし廃物となり、博物館に放りこまれてしまう。が、文学は必ずしもそうではない。むしろ文学にも、それに似た淘汰とうたがまるでないわけではなく、また技術の発達ということもあるのであって、たとえば『万葉集』と『新古今集』の歌をくらべてみれば、前者にない新規の表現技法が後者に発達してきているのがわかる。技法のこういう発達は、かなり厳密に科学的に確定できる、文学史におけるほとんど唯一の要素といえるかもしれない。ところが文学では技術はたんに新しい可能性を約束するのみで、それを目安に作品の位置を決めるわけにいかない。

何が新しく何が古いかは、文学上、かなり厄介な問題ということになる。漱石の小説の方がある種の現代小説よりかえって新しいと考えたにしても、時勢おくれであるわけではないし、『万葉集』をそのこの歌よりいいと感じたからといって全く逆だちであるわけではない。遠くて近いのは男女の仲とか地獄とかだけではならしい。明治の話だが、正岡子規は遠い万葉の歌を一気にたぐりよせて短歌革新を成就した。文学において古典という奇妙なものの成立してくる根拠が、このへんにかくれているようだ。

ある時代の文学は、それ以前の文学のもっていたもろもろの機能や要素をすべて包みこみ総合しながら出てくるのではなく、「A」、あるものを失うことによってあるものが得られるという歴史的矛盾がそこにはあると見える。だから古代から近代へと失われていく何ものかがあり、同時に、

失うことによって獲得される何ものかがあるというわけで、古い作品がわれわれに魅力を与えるのも、われわれの手持ちでない、だが持ちたいと欲する新しい何かが、時としてそこに発現していると感じるからにちがいない。

よく古典の永遠性ということがいわれる。が、^b そのしかける陥穽^{かんせい}におちこんではなるまい。かりにある作がずっとよまれつづけてきたにせよ、享受の中味は、時代で変ってきているはずで、またそれはこれからさき^d 必ず変って行くだろう。「B」、どう変っていくかを目測できない。われわれの現にありがたがっている作がよまれなくなることだってないとはいえず、思いがけぬ作が浮びあがってくることもありうる。^e 戦前戦後をふりかえてみても、その間あるものが死に、あるものがよみがえってきたのを見とどけることができる。われわれじしん、この絶え間ない変化のなかにいるのであって、自己の位置を絶対化することは自己を凍結させることになりかねない。年少時の文学経験について羞恥を抱かぬ人がいるだろうか。何をどのように古典として設定するか、「C」その選択と解釈は、かくして時代によって変容をうける。われわれはもう宣長と同じように『古事記』や『源氏物語』をよまぬだろうし、真淵や子規と同じように『万葉集』をよむこともしないだろう。研究がすすみ新事実を知ったためだけでない。それもむろんある。「D」、それのみと考えるのは学者の思いあがりで、いつそう根本的には時代の文学経験や文学概念が、宣長や子規などの時代と異なる性質のものになっていくためである。

誰がどのように作品をよむかということをはなれて作品そのものの永遠性を論ずると、どうしても形而上学を作りあげる仕儀になる。作品そのものというようなものはどこにも存在しないし、誰にも経験できないだろう。「E」、古典と呼ばれるものはどこにあるかといえば、それは過去と現代のあいだ、つまり過去にぞくするとともに現代にもぞくするというほかない。日附がいかに古かろうと、文学として訴えてこなければそれは古記録で、現代人に対話をよびかけてくる力をもったもののみが古典であり、そしてこの過去と現代に同時にぞくするものを、歴史的継起の秩序における一つの特異な人間活動としてとらえようとするのが文学史の役目ということになるだろう。

語注 ※陥穽^{かんせい}……落とし穴。 ※形而上学……存在や物事の本質は何かといった、日常で当然視されている事柄の背後にある根本原理を問う哲学の学問。

(出典…西郷信綱『日本古代文学史 改稿版』岩波全書、一九六三年)

問一 空欄A～Eに入る適切な言葉をそれぞれ次のA～カから選び、記号で答えなさい。

A では イ しかも ウ むしろ エ が オ つまり カ また

問二 傍線部a「時勢おくれ」の意味として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 時代を読み違えること。 イ 世の中のなりゆきから遅れること。
ウ 時の流れに身を任せること。 エ 世の中の流行についていけないこと。

問三 傍線部 b 「そのしかける陥穽^{かんせい}におちこんではなるまい」について、次の①・②の問いにそれぞれ答えなさい。

① 「それ」とは何か。本文中から六字で抜き出しなさい。

② 「そのしかける陥穽におちこむ」とはどのような事を意味するのか。その事を的確に述べている文章を本文中から三二字で抜き出しなさい（句読点を含まない）。

問四 傍線部 c 「時代」を作者はどういったものとして捉えているのか。その事を述べている言葉を本文中より七～一〇字で抜き出しなさい。

問五 傍線部 d 「必ず変わって行く」とあるが、それを变える最も重要なものは何だと言っているのか。該当する内容を本文中から一五字以内で抜き出しなさい。

問六 傍線部 e 「戦前戦後」とあるが、ここで言う「戦前戦後」とはいつの事か。最も適切なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 南北戦争 イ 第一次世界大戦 ウ 第二次世界大戦 エ 日清戦争
オ 日露戦争

三 次の文章を読み、問一～問六に答えなさい。

日常美学の二つの主要な立場

私たちの日常はあまりに多様なので、日常美学において議論すべき経験、すなわち私たちの日常生活のなかでの典型的な「X」とはどのようなものか、ということが問題になってきます。

この点をめぐって、日常美学には大きく分けて、二つの立場があるとされています。

一つめの立場が、「

Z

」立場です。先に名前を挙げたナウツ

カリネンは、日常美学がまさに「日常」を論じるものであらうとするならば、パーティーなど日常のなかの特別な経験を無視すべきではないものの、中心的に論じられるべきは平凡で、まさに私たちの日常の核を作り上げている、家事や仕事などのルーティン的な活動がもたらす美的経験だと述べています。

同様の考えは、本書では第四章で詳細に取り上げるフィンランドの美学者アルト・ハアパラにも共有されています。彼は、安定して遂行される「Y」の心地よさを基盤とする親しみの感情こそが、日常生活のなかでの美的経験の特徴づけるものだと考えています。「A」私は毎日パソコンや本に向かって仕事をして、同じルートで自転車漕いで、使い慣れたカップでコーヒーを飲みます。こうした日々の繰り返しを与えてくれる心地よい親しみの気持ちだが、日常的な美的経験の典型的なあり方だと考えるのです。

これに対して、「

W

」立場があります。この立場はそもそも

ルーティーンベースの安定した日常に対する感情は果たして本当に「美的」と呼ぶことが妥当なのかを疑問視します。

アメリカの美学者トーマス・レディは、日常生活はそれ自体では平凡なものであるのにもかかわらず、そこに非凡なものを見出す芸術家をモデルとして、日常美学を構築します。平凡なものが特別なオーラを纏^{まと}うことで非凡なものへと変容することを通して初めて、「美的」と呼ぶに値する経験が生じる、というのがレディの考え方です。

家の中にあるコップを、いつもと違う角度で見つめてみる。「B」、これまで気付かなかった特殊な美しさに気付く。平凡なものを平凡なものへと変容させることができ、初めて美的経験が得られるのであり、そのために私たちはふだんと異なる態度で対象に向き合う必要があるとレディは考えます。

「C」そのコップは何か特別な見え方をしていて、もはや日常の一部を構成するものとは受け止められなくなっているかもしれません。平凡なものが非凡なものに転じてなお、それは日常の一部と呼べるのかという問題が生じるのです。

日常の安定性に目を向けるとそれは「美的経験」なのかという問題が生じ、美的経験の特別さを強調すれば、今度は「日常」の話になるのかという問題が生じてしまう——これは日常美学について回ってきた「デイレンマ」であると言えます。

世界制作への参加

ここまで確認してきたように、日常美学という分野は決して一枚岩ではなく、さまざまな立場の論者がそれぞれに日常生活と美学の関係を捉えようとする実験場であるということが出来ます。本書では、あらかじめこれらのうちどれが正しいというような肩入れはせず（《中略》）、さまざまな立場を概観しながら各主題についての議論を深めていきます。

とはいえ、いずれの立場を取るにせよ、日常美学に共通する理論上のスタンスとして、「世界制作への参加」という側面を捉えようとするものが挙げられると思われます。本節の最後に、この点について確認しましょう。

理解を深めるために、「伝統的な芸術作品の場合と比較してみよう。私たちは芸術作品をまえにして、「鑑賞者」という立場を取ります。たとえば絵画は私がそれを観る前に、芸術家によって、すでに作品として完成されています。音楽作品はその場で演奏されますが、クラシック音楽が典型的なように、私はその場にいなながらも演奏に参加することはなく、客席でそれを聴いている鑑賞者です。

《中略》

このように、芸術と呼ばれうるものが多様であるのは確かです。「D」、私たちの日常生活はそもそも事の始まりから、ずっと私たち自身が紡ぎ出していくものであるという点で、芸術（的なもの）とはやはり一線を画していると言えるでしょう。

この点について、日常美学の先駆者の一人であるサイトウは、「世界制作」ということばによって鮮やかに描き出しています。世界制作とは文字通り、世界をつくる、ということの意味します。サイトウによれば、私たちは一人一人、みなが世界の制作者なのです。

《後略》

（出典：青田麻未『「ふつうの暮らし」を美学する』光文社、二〇二四年）

問一 空欄A～Dに入れるべき言葉として最も適切なものを、それぞれ次のア～カから選び、記号で答えなさい。ただし、各空欄には別々の言葉が入ることを留意しなさい。

ア しかし イ そして ウ たとえば エ すると オ もはや
カ ただこのとき

問二 空欄X・Yに入れるべき適切な言葉として、それぞれ本文中に使用されている言葉から抜き出して解答欄に書きなさい。

問三 空欄Z・Wに入れるべき文章として最も適切なものを、それぞれ次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 日常のなかの特別なものに注目するべきだという
イ 日常のなかの家事や仕事を大切にすべきだという
ウ 非日常の経験で得られる美意識に注目するべきだという
エ 日常のなかの平凡な側面に注意を向けるべきだという
オ 非凡な芸術家の日常生活を参考にすべきだという

問四 傍線部a「ディレンマ」とあるが、その言葉の一般的な意味の使い方として、不適切な例文を次のア～オから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 環境保護と経済成長の両立は、地域社会が抱える一つのディレンマと言えよう。
イ この小説は、主人公が危険な問題を抱えていたが、最後にはそのディレンマを解決してハッピーエンドを迎えた。
ウ 本日の試験は、二つの別々の設問が難問だったが、ディレンマを乗り越え両方とも正答することができた。
エ 私は、海外留学をしたい気持ちはあるのだが、家族への家計的な負担を考えて、深いディレンマを抱えてしまった。
オ そのニュースの記者は、自由な表現を守るべきか、他者への配慮を優先すべきか、というディレンマに陥っている。

問五 傍線部b「世界制作への参加」とあるが、このことについて本文の主張と食い違う事象を、次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 子育て中のお父さんが、子どものお弁当を毎朝作る工程に、家族への愛情と生活の彩りを込める。

イ デザイナーや建築家が、実際に新たな都市空間を生み出し、私たちの生活基盤をつくりあげる。

ウ 芸術家が、毎朝行う散歩中に見かけた落ち葉の配置から、次の作品のインスピレーションを得る。

エ 大学生が、日々通う図書館で偶然手に取った詩集本のページに、人生観を変えるような美的な思想との出会いを感じる。

オ リタイアしているシニアが、地域のボランティア活動に参加し、社会とのつながりを積極的に保っている。

カ 地方移住者が、庭の草花に水をやる日課の中で、季節の移ろいと命の豊かさを味わい、これをSNSで日記風に日々発信していく。

問六 傍線部c「伝統的な芸術作品の場合と比較」とあるが、日常美学と伝統的な芸術によるものとの違いを、本文中の言葉を用いながら一〇〇字以内で説明しなさい。

問二 $X \wedge Y$

問四

問五

[illegible]

▲
100 字

二〇二六年度 一般選抜型選抜 後期国語 解答例・出題意図

一 (計16点)

- | | | | |
|--------|----------|--------|---------|
| ①「ゆだ」 | ②「きゅうとう」 | ③「みぞう」 | ④「かんでつ」 |
| ⑤「逸した」 | ⑥「実践」 | ⑦「均衡」 | ⑧「循環」 |
- (2×8＝16点)

二 (計41点)

問一 A「ウ」 B「イ」 C「オ」 D「エ」 E「ア」

【出題意図】

文章読解力と、文と文との論理構造を読み取る力を問う。

(3点×5＝15点)

問二 「イ」

【出題意図】

文脈を読み取る力と、語彙力を問う。

(3点)

問三 ① 古典の永遠性

② 自己の位置を絶対化することは自己を凍結させることになりかねない

【出題意図】

文章読解力と、論理構造を読み取る力を問う。

(5×2＝10点)

問四 絶え間ない変化(のなか)

【出題意図】

文章読解力と、論理構造を読み取る力を問う。

(5点)

問五 時代の文学経験や文学概念

【出題意図】

文章読解力と、論理構造を読み取る力を問う。

(5点)

問六 「ウ」

【出題意図】

文脈を読み取る力と、語彙力を問う。

(3点)

三 (計43点)

問一 A「ウ」 B「エ」 C「カ」 D「ア」

【出題意図】

文脈を読み取る力を問う。

(各2点×4＝8点)

問二 X「美的経験」 Y「ルーティーン(ベース)」※他別解あり

【出題意図】

文章読解力と、語彙力を問う。

(各4点×2＝8点)

問三 Z「エ」 W「ア」

【出題意図】

文章の論理的な構造を読み取る力を問う。

(各3点×2＝6点)

問四 「ア」 「ウ」

【出題意図】

文脈を読み取る力と、語彙力を問う。

(各3点×2＝6点)

問五 「イ」 「オ」

【出題意図】

文章読解力と、そこから派生する想像性を問う。

(各3点×2＝6点)

問六 **【解答例】**

日常美学と伝統的な芸術の違いは、日常美学が、私たちの日常生活においてそもそも事の始まりから、ずっと私たち自身が紡ぎ出していく点で、芸術家の完成された伝統的な芸術による美学とは一線を画すことにある。(98字)

【出題意図】

文章読解力と、文章を作成する力を問う。

(9点)